

とどめられており、編者の永島氏は、前二著の編集にも携わられたので、史料の選択等に遺漏はない。今回の書物とあわせて、三部作ともいべき構成になっている。

ただひとつの短所をあげると、店印などを示すためとして影印図版で掲げられた約四〇ページの史料が、意図に反して必ずしも鮮明でない部分のあることを遺憾とする。黒田家文書が所有者による選別保存を受けたもので、他の史料が焼却されたいいのは誠に残念だが、それも内容がすぐれているからで、これを機会に他の家々の文書調査が進むことを期待したい。

(A5版 七〇〇頁 口絵写真六頁 史料編六〇〇頁 解説研究編八四頁 参考文献・年表つき、一九七八年三月 思文閣出版 一〇、〇〇〇円)

(朝尾直弘 京都大学助教)

門脇 禎二著

『蘇我蝦夷・入鹿』

本書は、十年余にわたる著者の「大化改新」批判、『日本書紀』の史料批判から導き出された蘇我蝦夷・入鹿像を提示したものである。第一部「豊浦大臣蘇我毛人」、

第二部「大臣」蘇我大郎鞍作」という二部構成になっているが、蝦夷・入鹿の人物像が『日本書紀』を編纂・述作した古代貴族の史観と通念」及び「近代の教育・文化政策のもとで培われた国家観や歴史意識」によって二重に歪められているとする著者は、「はじめに―叙述の前提―」において、『日本書紀』の性格、七世紀前半の宮廷制度、蘇我蝦夷・入鹿の名に検討を加え、上述の如き歪みから「自らを解き放つて考えよう」とする。

二人の名前についてのみ紹介すると、まず蝦夷は『日本書紀』ではこの用字に統一されているが、『上宮聖德法王帝説』に「蘇我豊浦毛人大臣」と見える如く「毛人」が本来の用字であり、「蘇我大臣」「豊浦大臣」が通称であった。蝦夷は侮蔑の用字であり『日本書紀』の編者がことさらに毛人を変えたものである。一方入鹿は本来、蘇我林臣鞍作であり、それが『古事記』仲哀天皇条に見える応神と伊奢沙和氣大神との易名伝承に登場する入鹿（海豚）に因んで入鹿とされ、「かれの僭越行為があったとされる天皇や殺害した山背大兄王に対する蘇我大郎鞍作の穢れ褻いがされている」と

する。

このように蝦夷・入鹿という名そのものにすでに潤色のとを見る著者は、以下の叙述を豊浦大臣(毛人)・蘇我大郎鞍作という本来の名ですすめていく。

第一部「豊浦大臣蘇我毛人」は、さらに四章にわかれ第一章では蘇我馬子と物部守屋の妹との間に生まれ河内の豊浦で育った毛人の生いたちにふれ、第二章では彼の政治的舞台への初登場の場である推古十年の新羅使引見について述べる。第三章では、父馬子の死後同族の最有力者たる叔父境部臣摩理勢を滅ぼして、同族の山背皇子ではなく田村皇子(舒明)の即位を毛人が決断する過程を描き、彼が名実ともに大臣の地位を確立した歩みを明らかにし、第四章において毛人と舒明の関係が次第に疎遠化していったことを説く。

第二部「大臣」蘇我大郎鞍作」も四章からなり、第一章では鞍作の生立ち、彼が僧旻の学堂に学び唐の新知識にふれたこと、豊浦大臣が舒明の後に山背大兄ではなく大后宝皇女(皇極)を即位させたこと、朝鮮三国をめぐる外交関係の緊迫等を説き、蘇我氏専権の事例と解されている甘檮岡の邸

宅について、外交の緊迫に対応するためのものとの注目すべき解釈を提示する。第二章では朝廷内部での官人勢力の変化、皇極と蘇我氏との対立が百濟大寺の再建・飛鳥板蓋宮造営をめぐって皇極二年頃から露呈したと説く。第三章では豊浦大臣による紫冠の私授によって父と並んで政局の中樞に出てきた鞍作が上宮王家を滅ぼした事件の原因・経過・影響にふれ、第四章ではいわゆる乙巳の変（蘇我本宗家滅亡事件）の直接的原因として、鞍作の難波遷宮計画があったとする。

以上きわめて大雑把な紹介をしたが、このような分析によって示された毛人・鞍作像はきわめて対照的である。毛人は父馬子の死後実力で大臣の地位をかちとり、鞍作は毛人から大臣の地位の象徴たる紫冠を授けられ政局の中樞に登場した。また彼らの政治的立場としては、毛人はいまだ氏族的思考の枠内に留まっていたのに対し、鞍作は唐の新知識にふれ、それに学んだ「新式の政治」をめざし、対唐接近を図るため難波遷宮計画をすらもったかなり開明的な政治家と評価されるのである。

著者がこのような人物像を導きだした方

法は徹底した『日本書紀』の史料批判とその他の異伝・外国史料の検討による歴史の再構成であり、それによって『日本書紀』の「逆臣」蝦夷・入鹿という像とはかなり異なった二人の人物像を描きだすことに成功したといえよう。

但し、いくつか疑問がないわけではない。二人の名についていえば、先ず毛人では東夷としての蝦夷と、『藤原家伝』の「必有夷・宗之禍」という意識の二つが「毛人↓蝦夷」という易名への要因としてあげられるが、両者がどのような関係にあるか不明確な点が残る。また蝦夷という字に強い蔑視感が含まれていることは確かであろうが、造東大寺司長官として有名な佐伯今毛人も今蝦夷と表現する例もある。こうした例をも含めた分析が望まれた。鞍作についても『古事記』の易名伝承の影響で入鹿とされたとの推論の根拠は十分なものとはいえないと考える。易名伝承は『日本書紀』にも見えるが（応神即位前紀）、そこには入鹿の話がでてこないことも、易名伝承と入鹿の結びつきにいささか疑問を抱かせる点である。

また鞍作の開明性の重要な指標たる難波

遷宮計画については、皇極紀に特徴的な予兆記事及び『聖徳太子伝暦』所引の「厝録」からの立論であり、それだけにそれらの史料のより深い検討が望まれるところである。

ともあれ、もはや『日本書紀』が描く蘇我氏像にとらわれることはできなくなった。今後一層の『日本書紀』の史料批判とそこから導かれる蘇我氏像再構成の深化は著者のみならず後学の者の責務であろう。尚、本書をより一層理解するためには、本書とほぼ時を同じくして刊行された同じ著者による『新版飛鳥』（NHKブックス）をあわせて読まれることをお勧めする。

（新書判・一六七頁、一九七七年二月刊
人物叢書一七七 吉川弘文館 六〇〇円）
（館野和巳 京都大学大学院生）

松山 宏著

『武者の府 鎌倉』

本書は日本文化の会編『記録・都市生活史』の第二巻として刊行されたものである。著者松山宏氏の中世都市に関する研究は、先年上梓された氏の論文集『日本中世都市